

南部氏の有力一族で宗家と対立、戦国末期豊臣体制に反抗、族滅した。

九戸氏

南部鶴
清和源氏義光流

九戸氏は南部氏の始祖光行の六男・行連を祖とする南部氏の族で、代々北奥の九戸を領知し、九戸氏を称した。鎌倉中期以降、初代行連より最後の当主政実まで十一代にわたって連綿したというが、累代の事蹟は不明な点が多い。

諸国が戦乱に明け暮れるようになった室町時代の中期、七代の九戸光政は三戸南部政盛の庶長子といわれ九戸氏を継いだともいわれ、本拠を代々の九戸城から二戸の白鳥城に転じたと伝ええる。この城はその後宮野城を称され、戦国時代になると九戸城と呼ばれるに至った。

光政の娘は久慈備前守に嫁ぎ、以来、九戸氏は久慈氏との姻戚関係を濃くしていくことになる。光政の曾孫連康の代になると、二男兼実姉帯を領知させ、姉帯城に居住させた。このことから、九戸氏は優勢となり、姻戚関係も北は金田一城主の四戸氏と結び、南は不来方城主福士氏および高水寺斯波氏と関係するなど、三戸の宗家をしのぐほどの勢いを示すようになる。

九戸氏の出自異説

前記のように、九戸氏は三戸を本宗とした奥州南部氏の一族とされている。奥州南部氏は、建久三年(1192)始祖光行が三戸に着任して平ヶ崎城を築き、そこを本拠として地頭代職を置き、光行自身は鎌倉に帰ったと伝えられている。ところが鎌倉期の北条得宗領関係の文書と三戸南部氏の記録とはまったくといっていいほど噛み合っていないのである。言い換えれば、鎌倉中期から南北朝初期のころまで、三戸南部氏はまったく北奥に存在していなかったといえるほどである。そして、建武元年(1334)を前後とする年代では、北奥羽の各地にあ三戸南部氏の領地の痕跡さえ見当たらない。加えて、鎌倉時代から南北朝初期まで南部氏の本宗は甲斐国に存在していたことも知られている。

以上のことから、九戸氏の祖行連が南部氏から九戸郡を拝領したとする説もにわかに信じがたいものとなってくる。元弘三年の北畠顯家の下文にも、九戸郡は結城親朝の領知するところで、南部氏とは無関係であった。このような状況のなかで、九戸氏は、鎌倉時代の初めより九戸で代々続いてきたとしているのである。そして、その代数を三戸南部氏の代数と比較してみると、おおよそ半分と異なっている。九戸家の代々はすべて長寿であったとは考えにくいことから、何代かの欠があったものか、あるいは後世に伝承もおもとに改作されたものと思われる。

九戸家の祖について、結城城攻撃の総大将であった小笠原氏ではなかったかという伝承もある。すなわち小笠原政康を祖とするもので、九戸村の九戸神社に伝えられた「小笠原系図」に記されている。しかし、この系図も近世初期に作成されたもので、

信憑性に欠けるといわざるをえない。とはいえ、政実の乱を書いた『九戸軍談記』のなかで、政実の家門を誇って「結城総大将美濃中川の惣領小笠原正安の子孫」と名乗り、また『靈山武鑑』に二戸城主「結城七郎正安」と記されている。

いずれが、真を伝えているのかは、いまとなつては証明することは困難であり、一応、南部氏の一族であるとするしかないようである。

九戸氏の立場

九戸氏十一代の政実が武将としての力量が優れ、九戸氏はかれの代にその軍事力が急成長を遂げ、津軽氏の独立を容易にさせたのは、九戸氏が南部宗家の動きを掣肘したためとされる。そして、九戸氏は三戸南部氏の家臣であったということで、現在に至っている。

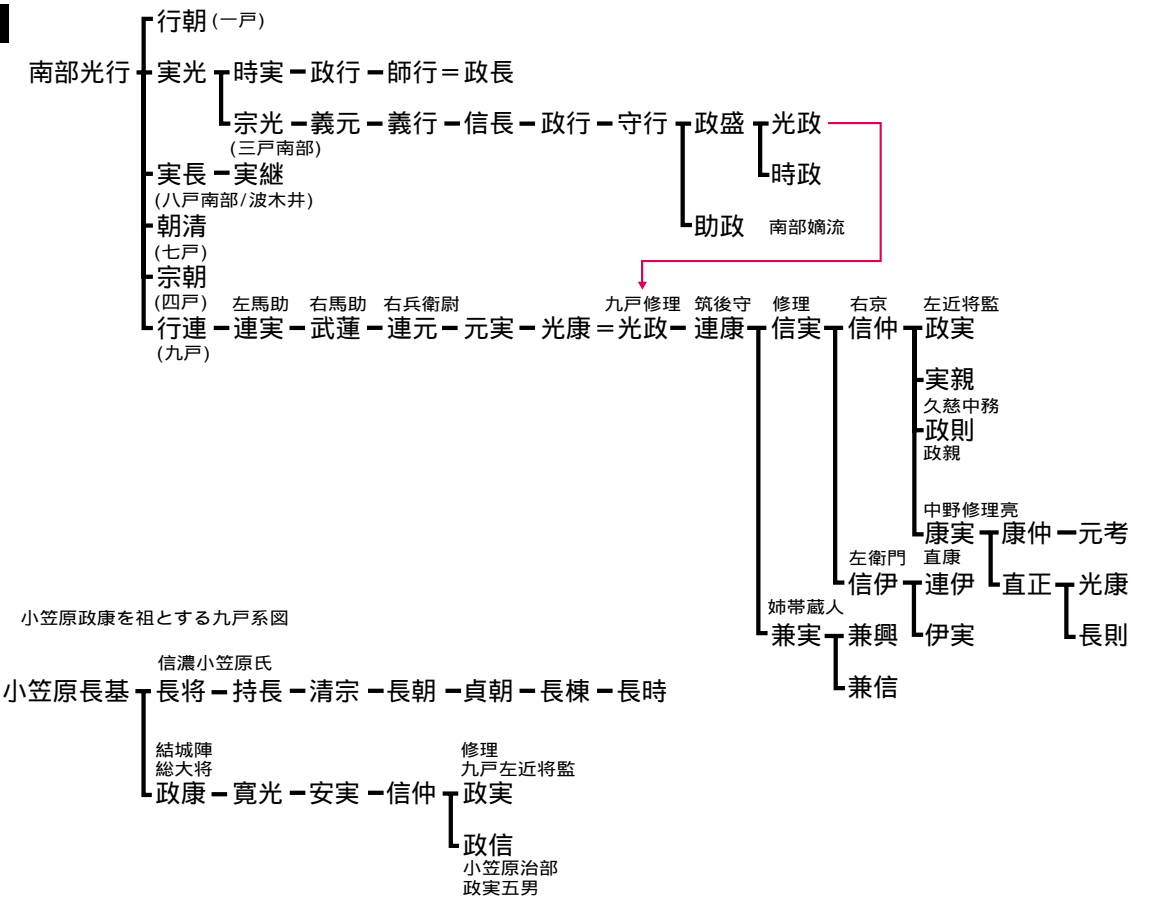
しかし、九戸政実、南部氏のなかの単なる館持ち武将ではなかったようだ。室町末期の永禄六年(1563)、足利将軍義輝が室町幕府諸役人の名前を書き出している。そのなかに、関東衆として南部大膳亮と九戸五郎が並んで記されている。ここのみえる九戸五郎は九戸政実をさすものと考えられている。このことから、九戸政実は独立した戦国大名の一員と考えられ、当時の南部氏と九戸氏はともに北奥を領地としており、北奥の地を二分する勢力を政実が持っていて、中央の室町幕府からも南部晴政と九戸政実が対等な戦国大名として認識されたいことは間違いない。

従って、九戸氏と南部氏の関係は、従来いわれる主従関係というよりは、対等の立場であり、ともに北奥地域の治安と平和を守ること協力してきたと考えられる。

九戸氏がこのように独立した大名に成長したのは、永禄八年(1565)に秋田近季が鹿角を侵略しようとし、翌年、長牛城を攻撃した。この変を聞いた南部晴政は一族の石川信直を大将として鹿角に派遣し、近季は形勢不利となって退去していった。しかし、その後ふたたび鹿角に侵入し、南部軍は敗れたため鹿角は秋田近季の領地となった。

永禄十二年、南部氏は鹿角の奪還をはかり、石川高信と九戸政実をそれぞれ大将として鹿角の秋田近季を討ち取るため兵を進めた。

参考略系図



ことに成功した。その後、岩手郡に進出してきた斯波氏に対して石川高信は九戸政実の協力を得て、不来方で斯波軍と激突し数日月にわたって戦闘を続けた。戦いは稗貫大和守の斡旋によって和平がなった。このように、九戸政実はその武威を示し、独立した大名としての立場を固めていったようだ。

南部氏の内訌

南北朝期から室町中期にかけて奥州南部氏の惣領は八戸南部氏であったようだ。しかし、八戸南部家には戦国乱世を乗り越えるような傑出した人物はでなかったこと、一族の間で内紛が起こるなどして次第に衰退していった。一方、三戸南部氏が勢力を拡大し、やがて南部氏の惣領的地位を占めるようになった。それは三戸南部晴政の時代であり、晴政を叔父の石川高信が支えて三戸南部氏の惣領的地位は確固たるものとなった。

晴政には長く男子が無かったため、長女に石川高信の嫡子信直を婿とし嗣子と定め三戸城内に居住させていた。しかし、晩年なり実子が出生したため継嗣問題が起こり、晴政と養子信直の間に不和が生じた。南部家関連の史書にはこのことはほとんど取り上げられていないが、『八戸家伝記』によれば、「南部嫡家晴政には五女子があり、長女田子信直に嫁し、次女九戸実親に嫁す。(中略)然るに家督相続の男子無し。晴政平日謂う、第一子婿田子信直を養い以て我が家を継ぐべし。永禄年中、晴政実子出生、寵愛も

深し。これより以来、漸く信直快からず。この間讒者あり、晴政に告げ曰く、信直怨み讒を構うと。晴政これを聞き、甚だこれをにくみ、便宜をうかがい信直を殺さんと欲す云々」と。

そのようなとき、北信愛は信直が不幸にあうことをあわれみ、八戸政栄と心を合わせて信直を三戸城から逃れさせ、かくまった。それを知った晴政は兵を發し、ついに合戦沙汰となった。やがて天正十年、晴政は病を得てついに死没した。その跡を継いだ嫡子晴継はわずか十三歳で、父の葬儀終了後、三戸城に帰る途中で何者かに教われ、暗殺された。この事件に象徴されるように、晴政の跡をめぐる南部氏の相続問題は根深いものがあった。

後継者決定のため、南部氏一族、重臣らによって大評定が開かれたが、後継者としては、晴政の前養子であった信直、一族の名門で最大に所領をもつ大身九戸政実、さらに八戸南部氏の嫡流として三戸南部氏を支えてきた八戸政栄、そのいずれもが有力と思われる。評定では晴政暗殺の疑いが濃厚とされ、九戸政実を推す空気が強かった。そのようななかで、北信愛がひそかに八戸政栄の協力を得て、信直を説得し、三戸城に招き入れた。かくして、南部信直が誕生したのである。

三戸南部氏との対立

三戸南部氏の相続問題は、信直が入ることで一応の解決を見たが、そこに至るまで九戸政実は終始信直に反対しつづけており、

